

メッセージを発信する本棚、
新しい図書館の作り方。

「アウトサイダーな生き方って、きついですか?」もし海外から友人が来たら、ここへ行こう」など、さまざまなコメントの書き込まれた黒板でできた本棚。ここは、全国の公共施設や企業が集まって図書館の未来について考える「図書館総合展」の帝京大学ブース。共読ライブラリーと名付けられたこの空間、いつもは帝京大学八王子キャンパス内にある図書館のエントランスで展開されています。学生自身がコメントを書き込み、そのコメントに応じた選書で本を並べたり、好きな本の推薦ポイントを紹介することで、本棚自体がメッセージを発信するメディアになるという試みです。開発を共同で進めるのは編集工学研究所。共読というコンセプトについて所長の松岡正剛氏は「自己完結型ではなく発展的循環型の読書形態で、本を薦めたり、連ねたり、読み合わせたり、話し合うことで、本についての情報を共有し読書への関心を上げていく手法だ」と述べています。そこには「この本棚が本を介したコミュニケーションツールとして、図書館の新しいシボルになってほしい」との思いがあります。

本棚作りに参加した学生は「本の並べ方に自分なりのストーリーが生まれて面白。一冊のキープックから、どんな世界が広がっていきました」と感想を話します。松岡氏にこのプロジェクトを依頼したのは、小林昌二館長(文学部教授)と図書館スタッフ。導入のきっかけは、学生と連帯できる本棚がほしいという願いからでした。共読をメインテーマに据えることで、学生の読書欲を掻き立て、学力の向上と情報編集力の獲得を目指す一大プロジェクトに発展。黒板仕様の本棚を「MONDO書架」と命名し、「問と答」をコンセプトに「本」と「人」をつなげる試みを実行中。学生自身が発信する本棚だけでなく、学生と読書好きな著名人との間で、本を通じたやりとりも行っています。例えば、サークルの部長をしている学生からの「部内のもとめ方に悩んでいる」という問いに対し、お笑い芸人の又吉直樹さんが、大槻ケンヂ著「ロッキン・ホース・パレリーナ」を選び、こうコメントを返します。「力づくで相手を制圧しても、けっきよく効果がないんです。ぼくの経験からのアドバイスは「アホなふり」をすること」。そんなやりとりが回を重ね、続けられています。学生が中心となった新しい図書館の作り方。共読空間は、ますます広がっていきそうです。



feel TEIKYO ft

あなたにつながる帝京大学 撮影・五十嵐一晴

#読ライブラリー